

読みやすく分かりやすい文章は ちょっとした工夫や配慮でできる。

内容を分かりやすく伝えるために、文章に工夫を施すことはきわめて重要です。
今回は、読み手に負担をかけず、「読まれる通信」とするための技法を考えてみました。

短い文章で伝える

記事内容を分かりやすく伝える技法として、理想教育財団ホームページ「通信づくりの知恵袋」で、コミュニケーションの達人・藤沢晃治先生は、次の2点を挙げています。

(1) センテンスを短くする。
(2) 段落の先頭に、文章全体の趣旨を書く。

まず(1)の、短い文章をという点は、多くの文章作法にある指摘です。藤沢先生は、ワン・センテンスは40文字程度を目安にしています。

長く親しまれている新聞の名物コラム「天声人語」(朝日新聞)「余禄」(毎日新聞)などでは、もっと短くて平均30〜32文字程度。外国人からも読みやすいといわれる志賀直哉や川端康成の小説も、ワン・センテンスの平均は33〜35文字です。

これはあくまで平均の文字数(句読点などを除く)で、文字数の多いセンテンスも含まれます。長短の文を混合させ、平均してこの程度の文字数にすることで、文章全体にはリ

ズム感が生まれています。

30〜40文字くらいを目安とすれば、読みやすい文字数ということが出来るでしょう。

1行が長すぎると読みにくい

ワン・センテンスの文字数と同時に、紙面上の1行の長さにも留意したいものです。

1行が40〜50文字と続くと、文字を追うことに疲れ、読む気をそぎます。ワン・センテンスが40文字であっても、これを1行で流す場合と、16文字2行半で流す場合とで比較すれば、読みやすさの違いが理解できましょう。

また、1行の文字数が長いと、次の行に移る際に、続きの言葉を探す作業が必要になります。目に余計な負担をかけますから、読み手のことを考えた文章とはいえません。

ただし、1行の文字数が少なすぎても、バラバラした感じを与え、読みにくいものです。

一般新聞は多くの場合、13文字程度ですが、子どもたちにはどれくらいの文字数が読みやすいのか、工夫したいものです。

多くても6行程度で改行を

同じように、改行も工夫したいところです。改行のない文章は余白がほとんどないため、読み手に段落が文字のかたまりのような印象を与え、圧迫感さえ感じさせます。

3行程度、多くても6行程度で改行していくことが読みやすい文章と言えましょう。

また、記事自体が長い場合、数行の段落ごとに1行の空白をつくること、読み手が一息つくことができ、読みやすくなります。

冒頭に段落の骨子を

次の(2)の「段落の先頭に、文章全体の趣旨を書く」という指摘は「予告効果」と藤沢先生が呼ぶものです。

藤沢先生は、文章全体の骨子を伝える段落が冒頭であれば、読み手は、真っ先にその文章の目的を知ることができ、情報をすばやく効率的に知ることができると言います。

記事の内容を分かりやすく伝えるという点で、藤沢先生は、箇条書きも勧めています。あえて文章にする

●参考のために、第4回「育て！プリントコミュニケーション」コンクールの入賞作品から、読みやすさの工夫をしている通信をご紹介します。



●教育通信「かけはし」
(山北町立山北中学校)

小見出しのほかに、段落ごとに1行の空白をつかって、読みやすくしています。また、一部にゴシック体の文字を使用、紙面に変化が出ています。



●学級通信「ぴちぴち」
(国東市立伊美小学校)

児童の会話を効果的に使って、紙面を親しみやすくしています。見出しも話し言葉で構成し、ストレートにつくり手の意思が伝わります。



●学年通信「ピカピカ」
(藤岡市立日野小学校)

この通信は他の号でも、1行を13文字～16文字で構成して、読みやすい紙面となっています。

会話や話し言葉の活用を

必要がない内容については、箇条書きを大いに活用したいものです。

分かりやすい、伝えやすい文章の技法として、会話（あるいは話し言葉スタイルの文章）を効果的に活用する方法があります。
会話は日常で最も身近なコミュニケーションの手段です。そのため

「」でくくられた話し言葉には、読み手は親しみを感じ、同時にその内容に興味を寄せます。

話し言葉で書くと、書き手にも、日常のおしゃべりと同様、相手にわかりやすい表現をしようとする姿勢が生まれます。

記事の冒頭や、特に注目してほしい内容などで、会話や話し言葉をうまく使ってみてはいかががでしょうか。

※学校名は応募時点のものです。